

# テレビ文化雑感

## 椎津浩忠

約半年にわたって、テレビを中心にマスコミ講座を担当してまいりましたが、その間、絶えず、今日のテレビ文化批判の姿勢で、ゼミナールを続けてきました私の考えの一部を、この欄をかりて書いてみたいと思います。

有名な一九六一年のアメリカのミノー宣言にあるように、テレビとは一体、今日も「果てしない一望の荒野」なのでしょう。テレビ文化氾濫のあり、こうした批判や警告が、反ってテレビの持つ所謂、大衆性以上の大衆性、私はこれを極大衆性と呼んで居りますが、この極大衆性から発するすさまじいエネルギーの前には、ややもすれば見過され勝ちで、ブラウン管に没する低調、低俗な番組は、一向に跡を絶たないのが現状ではなからうかと思えます。

もっとも目くららを立てて、テレビ芸術不在

を嘆くとか、テレビ文化亡国論を訴える積りではありません。むしろテレビ文化は電波通信技術の生んだ最新の視覚文化である事に留意して、日々進歩してゆく、その伝達と表現の可能性を見極めながら、そのエネルギーの消化を有意義あらしめたいと考えている訳です。

ではどのようにすればよいのでしょうか？何よりも重要な事はテレビジョンの送り手側、即ち、ステーション、スポンサー、代理店を含む制作者側が、テレビジョンの社会的貢献度というものについて、より真摯な覚悟を持つ事でしょう。

そして、送り手と受け手（視聴者）の間にある断層に注意しなければなりません。何故なら、この断層の故に、送り手は屢々迷路に入ってしまうのです。つまり、送り手側から

みて、この断層を架ける唯一の橋が視聴率という事が問題になる訳です。而もこの視聴率たるや、誠にもって正体不明のもので、秘密のヴェールに包まれた怪物なものも拘らず、送り手をテントコ舞いさせ、近視眼に陥らせる魔力をもっているのですから。事実、ステーション内におけるこの怪物に対する異常な程の動きは、局外者の想像の域を脱して居ります。これは今日の日本のテレビ機構が、アメリカに比して頗る狭小な経済力しか持たないにもかかわらず、彼の国と同様な形態を採って、民間テレビの併立、その自由競争をさせた弊害の一つと言えます。

そして送り手からの一方通行である、テレビの伝達が、受け身一方の受け手の代弁者である正体不明の視聴率によって、左右されるという事は皮肉であると同時に、送り手の見識のなさをばく露するものと言えましょう。視聴率が常にイコール番組の質ではない事は今日、自明の理ですが、それすら、認識出来ないのが、テレビ企業が生んだ矛盾なのです。そこには選挙の投票数の結果による、大衆が支持したとする政党、この投票数と政党との間にみる、選挙制度上の浅薄な数字の害

に似たものがあると云えます。これは人間の個性や主体性が失われつつある現代の特質に一層の拍車をかけるもので、大変危険な事と言わねばなりません。

そして現代のテレビ文化が、既存の文化が創り出したような価値を見出す為には、やはり、テレビ文化の特質を生かす事に尽きると思えます。

映画が、そのフィルムとモニタージュによつて映画芸術を生み出し、画面の変化や拡大によつてその特質を伸ばしたように、テレビも又、その電波通信技術の特質によつてくるところのものを生かす事が必要だと思えます。それは巷間言われるような底の浅い、芸術祭用の番組でもなく、ましてや今日言われているところのテレビドラマのカテゴリーに入るものではないと思えます。

世間で所謂ドラマという概念について言うならば、テレビドラマと映画ドラマの差は、前者がブラウン管を通じ、後者が映画のスクリーンを通じたものと言った程度の、極言すればほぼ同質のものでしょう。

仮にテレビには、テレビ用のシナリオがあ

り、テレビ用の演出があるからという事で、テレビドラマとするならば、それはテレビの本質からみて、真のテレビドラマとは言えないと思えます。

併し、同じルポルタージュの場合、テレビが同時中継というテレビ機能の特質に依つた場合、その迫力と真実性は、映画のあらゆるルポルタージュ、記録もののそれを遙かに凌駕し、両者の画面の大小による視覚的優劣などは、視聴者の心理的衝動―感動―の差を考えれば論外のものと言えます。

而もテレビによる直接伝達は、他のメディアの武器とする新聞の解説性、映画の編集性をも兼ね備えて居り、映像と音を即座に何度も再現する事も、また、スローモーション、ストップモーションも併用出来るのです。

このように、テレビの特質は、技術そのものの特質であり、従つてテレビ文化は、電波通信技術の発達に依つて、変つてゆくものであつて、在来のテレビ文化の産物に対する批判は、その意味において性急の感がありません。けれども文化は常に流動して居り、テレビ文化はその極大衆性の故になおざりに出来

ないと思えます。

☆ ☆ ☆

ところで、一九六七年という年は、まさしく、テレビジョンの技術的發展において、新しい段階に入った年と言えます。

即ち、放送衛星が完全に実用化に入つたという事で、テレビ文化が真に二十世紀の最新のマスコミニューケーションの担い手となつた事です。

テレビが誕生してこの方、マイクロウェーブによる国際間の中継放送は主として欧州では実用化されて居り、一九六二年のテレスタ―放送衛星によつて、限られた時刻に、限られた時間、欧米大陸間でも中継が行なわれました。しかも、この度の通信衛星は、常時、通信可能な静止衛星であり、識者によれば、全世界をカバーするのに三個の衛星で十分であるという事です。

従つて、この成功により、二、三年以内に通信衛星による全世界テレビ中継の見通しがついた訳です。猶、その完全実用化のグローバルな問題については、余すところ、言語の相違と、世界各国のイデオロギーの不一致と

いう事にしぼられてきたと言えます。

放送衛星のこうした意味での、実用化という事で、一九六七年はテレビ文化の使命といった点でも、テレビ番組の質的变化といった点でも、大きな転換期となった訳です。

具体例として、二、三挙げるならば、まずメキシコのオリンピック大会の実況に、世界中のテレビ視聴者が参加出来る事になり、専門家筋によれば、この新しいジャンルである、「宇宙中継」のタイトルの視聴者の数は、五億〜六億に達するものと見做されています。

又、日本、アメリカ間の定期的カラー中継放送も行なわれるでしょうし、日本自らの手になる放送衛星の打上げも、ここ二、三年のうちとなれば、現在、宇宙中継放送の大きな障害の一つになりつつある、衛星のコスト高も大きく緩和されるでしょうし、何よりも、直接、世界の平和への貢献に果す、テレビの役割が注目される事でしょう。

キューバ紛争に果した、ラジオの役割を考えるまでもなく、ベトナム戦争を始めとして、世界紛争の焦点が、宇宙中継によって全

世界の茶の間に露呈されるならば、その意義は詳説するまでもなく重要なものとなる筈です。

テレビ文化の果し得る、最も顕著な事は、かくして、如何なる既存の文化にもまして、世界中に真実を直接生々しく伝達出来るという事です。

併し、文明の利器も、一つ方法を誤れば、大きな悲劇を生ずる事は既に歴史が証明しており、折角文字通り、日進月歩の電波技術の生んだテレビ文化も、それが直接個人の生活を脅かす事はないにしても、最初に述べたように、送り手側に、正しい時代感覚と生活感覚が欠け、その上、不当な利害関係に左右されてしまつては、受け手側の正しい主張も無視される事になり、テレビ文化の特質である極大衆性エネルギーを不当にゆがめる事になってしまふ訳です。

そして、そこには受け手側の主体的な介入の素地が次第に失われる事になります。

一つの洋服地の流行が、布地販売業者とのタイアップによって、仮に赤と決定されれば、赤の布地だけが市場を占有し、剩え、そ

の流行色売出しの為に、科学的説明が加えられ、購買層に心理的圧迫をも醸し出されるといった風潮、服飾文化にみられるこうした傾向が、テレビの送り手、受け手の両者間に在し得ないとは言えないし、テレビ文化はその技術的な一方通行性を、論理的に相互通行に持つてゆくべく、特に送り手側に肝心の心掛けがあつてほしいと思うものです。

テレビ文化がその特性を生かし乍ら、その技術的特性を超えて、この様な相互理解に到達した時は、テレビはその新しい芸術を真に見出す事でしょう。

そしてその新しい芸術は、よりグローバルな視点に立った、送り手側が、情緒というようなものを意識的にとり扱つた冷酷なカメラの映像の捉えた壮大な叙事詩とも言うようなものではなからうかと思ひます。

このようにしてテレビ文化が自ら体臭として持っている低い日常性から脱してこそ、テレビ文化自体が自らの個性を持つ事が出来るのであり、二十世紀のマスコミュニケーションの旗手としてその使命を果し得るものと思ひます。